淀川愛好会 YODORIC NEWS

No.104 2023 年 12 月発行

〈 社会人の窓 24 〉

ドナウ川クルーズ

石田 裕子

さて、前回に引き続きウィーン出張について書かせていただきます。国際学会では、エクスカーションが楽しみの１つですが、いろんな見学先がある中で、やはりここはドナウ川を船で下りたいと思い、ドナウ川東部の統合的河川管理プロジェクトの見学ツアーに参加しました。

ドナウ川はドイツ南部のシュヴァルツヴァルト（黒い森）に端を発し、中欧・東欧 10 か国以上を流れ、黒海に流出する国際河川です。流域を占める割合は、大きいほうからルーマニア（28.9%）、ハンガリー（11.7%）、オーストリアとセルビア（各 10.3%）と続きます。オーストリアはドナウ川の上流から中流にかけての区間です。 学会会場だった国際会議場は、ドナウ川のいわゆる「中の島」にありました。ドナウ川の右岸が旧市街、中の島から左岸側が新市街のようでした。

エクスカーションは午後からで、会場でランチバッグ（サンドイッチ、リンゴ丸ごと 1 個、お菓子、水）を受け取り、ドナウ川右岸のクルーズ船乗り場から乗船しました。東部（下流）に向かって、船が進みます。まだウィーン市内のすぐ下流の左岸に、ドナウ＝アウエン国立公園があり、ここは中欧最大規模の氾濫原湿地だそうです。ここを見学するエクスカーションも別にあったのですが、それに参加した人の話では、ひたすら公園の中を 2-3 時間歩いて見学したとのことでした。

ウィーンからブラチスラヴァ（スロベニアの首都）にほど近いハインブルク・アン・デア・ドナウという町まで約 40㎞ を 3 時間ほどかけて下りました。川幅や勾配は、いつも見ている淀川（淀川大堰の湛水区間）とよく似ていました。ヨーロッパの河川は流程が非常に長く、勾配が緩いのが特徴です。船で下ったこの 40㎞ 区間の全域で、主に左岸側に氾濫原があり、ここでは長い時間をかけて復元や自然再生がおこなわれています。船から見えるところでは、石積みの水制工が流路に対して垂直に設置され、その間が淀川のワンドのように流れの緩い水域ができていました。また、一部の場所では、古い水制工を除去し、新しい水制工を下流へ向かって斜めに設置し、日本でも見られるバーブ工のようになっていました。2km も連続する区間で河岸の再生工事がおこなわれているところもあり、日本の河川の自然再生事業とのスケールの違いを感じました。

左岸は基本的に自然状態の河岸でしたが、所々にボートハウスが設置されており、漁師のものだそうです。何が捕れるのかわかりませんが、ドナウ川にも川漁師がいるようです。また、砂浜になっているところでは、水着姿で泳いでいる人たちも見ました。別荘のような建物やカフェも、川沿いにありました。水制工の上に立って釣りをしている人、ゴムボートやカヌーに乗っている人たちもいました。夏だったので、それぞれが川のレジャーを楽しんでいるようでした。

ウィーンから出てすぐのところに、フロイデナウ水力発電所があり、ここを下る時に閘門を通りました。基本的には、淀川の毛馬閘門と同じでした。また、途中で土砂を採取する船が何隻も通り、これも淀川のようでした。淀川と違ったのは、大量の車を積んだ大きな船が行き来していたことでした。ドナウ川は物資を輸送する役目も果たしているのです。

終点のハインブルクに到着したのは 17 時を過ぎていました。そこからはバスに乗り、1 時間ほどでウィーンに戻りました。船の中では、アルコールを含むフリードリンクと軽食が出ました。淀川でも、舟運の復活が言われていますが、長い乗船時間を飽きさせないようにする工夫が必要です。

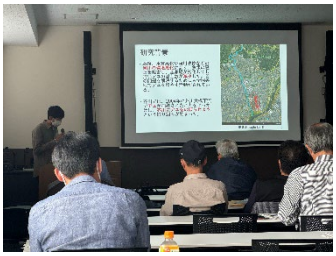
ゴムボートを楽しむ人たち

（淀川愛好会総務、摂南大学理工学部都市環境工学科教授）

イベント報告

京の川の恵みを活かすフォーラム・食味会

10 月 22 日(日)と 29 日(日)に京都大学宇治川オープンラボラトリーにて京の川の恵みを活かすフォーラム及び食味会が行われました。まず、22 日は様々な河川団体が集まり、アユ等についての遡上状況や生息状況の報告会があり、様々な角度でアユのことを知ることができました。また、翌週の 29 日には同所にて、食味会が行われました。鴨川の鯉や淀川の天然鰻、異なる河川でとれた鮎、あら汁を頂きました。参加した私たちも、魚で作った料理を食べ、ほっぺたが落ちそうでした。(K・T、一部K・Y)



左上 報告会で発表している石田ゼミの奥村君
左下 食味会の開会式　右 アユを焼いてる様子

天若湖アートプロジェクト 2023

「あかりがつなぐ記憶」

11月４日(土)から11月５日(日)にかけて京都府日吉ダム周辺にて天若湖アートプロジェクト2023「あかりがつなぐ記憶」が行われました。本来今年は６月に行われる予定でしたが、台風の影響で11月に延期されました。延期とはいえ無事に開催されたことをうれしく思います。

まず、天若湖アートプロジェクトとは、ダム建設により5つの村を水没させてしまったという背景を多くの人達に認識してもらうことを目的として開催しており，水没した村のことを忘れないように水没家屋の上の湖面にあかりを灯すイベントです。今回は天若湖の水位の低下により、世木林と沢田の2地点しか実施できませんでしたが、晴天だったということもあり、星とあかりの両方を綺麗に見ることができ、幻想的な景色を眺められ一同見惚れていました。(K・T)

湖面に浮かぶあかり

あかり設置に向けての会議（殿田トークホール）

茨田イチョウまつり

11月19日(日)に寝屋川市茨田樋遺跡水辺公園にて茨田イチョウまつりが行われました。Eボート体験やどんぐり工作などのクラフト体験、堤防決壊模型実験、防災紙芝居、豚汁やふかし芋、銀杏の試食がありました。石田ゼミはふかし芋づくりの手伝いと銀杏を炒める作業をしました。参加者がふかし芋や銀杏を美味しそうに食べる様子を見て、僕らも心が温まりました。僕自身は豚汁にハマってしまい何杯もおかわりしてしまいました。(K・T)

イチョウまつりの会場の様子

クリーンリバー寝屋川作戦

11 月 26 日(日)に今年二度目のクリーンリバー寝屋川作戦が行われました。前回に引き続き寝屋川せせらぎ公園と幸町公園の二地点で実施し、一般参加の募集はしなかったため参加人数は合計で 50 人ほどの規模となりました。

季節は冬に差し掛かり、朝の作業だったためかなり冷え込んでいました。また参加人数も多くないため作業の進行が危ぶまれるかと思いましたが、それぞれがスムーズに役割分担をして取り掛かったため予定通りに作業を終えることができました。(O・S)

作業風景

「みんなの大和川」わくわく広場

10 月 15 日(日)、大和川河川事務所とその前の河川敷で、大和川市民ネットワーク主催のわくわく広場が開催されました。11:00 から室内で「大和川の日」の話・昆虫調査の話と観察、12:30 から２つのグループに分けてボートと虫とり、13:30 からバッタのオリンピック、最後に感想交流という流れでした。当日は気持ちのいいお天気でしたが、大和川は前夜の雨で増水し、流れが速かったため、E ボートは安全性を考慮してわずか 50mほどの区間での実施となりました。虫しらべは建設環境研究所のお世話で実施されました。子供たちからは「虫とりをもっとしたかった」「もうちょっと舟に乗りたかったけど楽しかった」、エコシビル部でも「長い距離を漕ぐことができればいいなあ」などの意見が挙がりました。(S・T)

足場台を用いた桟橋での乗船補助

イベント案内

淀川愛好会 総会 2024

日時：2024 年２月 24 日(土) 11 時～12 時
場所：摂南大学寝屋川キャンパス１号館３階 都市環境工学科会議室

第８回 近畿河川フォーラム　兼

第 25 回 淀川討論会

日時：2024 年２月 24 日(土) 14 時～17 時
場所：摂南大学寝屋川キャンパス３号館 311 教室
内容：河川協力団体の動向
　　近畿における舟運文化の伝承
　　参加団体の活動紹介
参加費：無料
懇親会：17 時半より学内で立食パーティー (3000 円)
申込締め切り：2 月 10 日
連絡先(問い合わせ先)：淀川愛好会事務局

いのちをつなぐ水と流域・地球市民対話ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ

地域対話フォーラム 2024 in Osaka

日時：2024 年３月２日(土)　10:30～17:00
場所：大阪市中央公会堂
内容：講演１　奈良時代の行基の構想力から世界水フォーラムまで　第３回世界水ﾌｫｰﾗﾑ事務局長　尾田栄章
　　講演２　水と生命誌 (仮)
　　JT 生命誌研究館名誉館長　　中村桂子
　　パネルデスカッション
　　「大阪湾流域圏で考える水と環境・生業・文化」
　　パネラー　竹門康弘・三和伸彦・鈴木康久
　　ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　澤井健二
　　「2025 年大阪・関西博覧会で議論すべき問題」
　　パネラー　福井昌平・稲本正・ウスビ サコ
　　ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　古澤礼太
　　ポスターパネル展　ポスター発表団体大募集！！
　　ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　石田裕子
　大阪湾に注ぎこむすべての河川流域の活動を発表してください
主催：同プロジェクト推進委員会
参加費：無料
問合せ先：淀川愛好会事務局

〈 学生の窓 24 〉

まもなく卒業

北岡　祥直

僕は現在、生態環境学研究室(石田ゼミ)に所属しています。自分の研究としては点野ワンドの新設ワンド(１号ワンド)及びに既設ワンド(２号ワンド)で５月・８月・10 月に地曳網調査を行い、それぞれ月別の魚類群集を比較して、どのワンドにおいて生物が生息するのに適しているのかを調べるということを主に行っています。地曳網を引くというのはかなり体力がいるもので、いつも調査が終わった後はへとへとでした。特に８月の調査は40℃に近い気温で地曳網を引くという地獄のような環境で行っており、今となっては大学生活における良い思い出ですが、よく熱中症にならなかったなと思います。

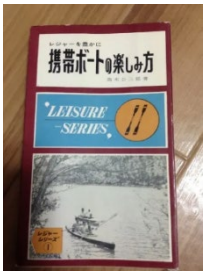
そのようなこともありながら調査はすべて終わりました。あとは卒業論文をまとめ、それが終わればいよいよ卒業できるというところまで来ました。この研究室での一年間で他の人の調査もたくさん手伝い、様々なボランティア活動にも積極的に参加してきました。その中で色々な経験をさせていただきました。これらの経験は来年度からの社会人生活に必ず役立つと思います。

地曳網を引いている様子

(摂南大学理工学部都市環境工学科石田ゼミ４年生
就職先：JR 西日本)

書籍紹介

「携帯ボートの楽しみ方」



発行年：1962 年
発行：西東社
著者:故京都大学名誉教授高木公三郎

高木博士は京都大学保健体育学教授で、日本にファルトボートを紹介され、その普及に尽力されました。この本の最後には、当時の京都大学の学部生が、高木先生手製のファルトボートで琵琶湖一周をした経緯や、自分たちで設計、製作した新しい舟で瀬戸内海を縦断した経緯が詳しく述べられています。（S・K）

目次 携帯ボートとは ゴムボート ファルトボート 携帯ボートを楽しむために こんな楽しみ方もある 渓谷下り・海上流浪体験記 付録 日本の河川・渓谷案内

編集後記

104 号を読むと、現代における２つの自然と環境の社会問題が浮かんできます。一つは「社会人の窓」の中、石田裕子教授は「淀川でも、舟運の復活が言われていますが、長い乗船時間を飽きさせないようにする工夫が必要です」と 語っています。すなわち淀川の自然環境と風景を見直し、少しでも船から見る視点が必要と読み取れるのです。関西万博の開催と共に舟運の機運が叫ばれておりますが・・・。

もう一つは、北岡祥直君の「学生の窓」の文面の中で、「8 月の調査は・・・地獄の環境で（中略）・・・よく熱中症にならなかったなと思います。」という言葉です。現在は夏が近づくと熱中症は、常態化しているのです。1970 年代頃の夏は外遊びが常識でありました。当時は熱中症ではなく、日射病と言っていました。暮らしや自然環境の変化と共に、冬は暖房、夏は冷房をかけ室内で気持ちよくゲームをし、身体に負荷をかけない、それぞれの環境に応じていないと感じるのです。徒然草の第 55 段（家のつくりやうは夏を旨とすべし・・・）を思い、すべての暮らしに自然を見直す視点と空間が必要です。

編集長 岡﨑善久（岡﨑善久建築設計事務所）

淀川愛好会事務局：〒572-8508　寝屋川市池田中町17-８　摂南大学理工学部都市環境工学科　石田研究室内
TEL/FAX：072-839-9125
HP：　https://www.setsunan.ac.jp/~civ/teachers/yodoric/
E-mail：ishida@civ.setsunan.ac.jp